

# 政治漫画にみる羽田政権

茨木 正治

- I はじめに
- II 事例研究
- (1) 分析手順
- (2) 分析結果と考察
  - 1 ユーモアの分析
  - 2 テーマの分析
  - 3 シンボルの分析
  - 4 文字情報（記事・社説）との関連
- III おわりに

## I はじめに

「政治漫画」は、多様な現実からそのいくつかを情報として凝集させ、かつ、一定の感情の喚起を狙って表象させる。この意味で「政治漫画」は、現実の再構成を促すメディアであるといえる。この現実再構成作用は活字メディアの再認や現状の肯定に留まる場合もあれば、新たな現実の生成にも寄与することもある。「政治漫画」の描く世界はこ

のように、描く対象自体と描かれた世界の公開の仕方の双方において「政治」的である。この「政治漫画」の描く世界の中に、九三年七月以降生じた「五五年体制」の崩壊はどのように描かれているのであろうか。連立政権は集合離散を繰り返すとはいえ、三カ月に三人もの首相が登場することは従来の日本の戦後政治のなかではきわめて珍しい事態である。特に羽田政権は戦後三番目の「短命内閣」であった。急激な政治の変動にメディアとしての「政治漫画」はどのように対応したのであろうか。政治批判の道具として体制を「笑いとばす」ことによって生き長らえてきた「政治漫画」は他のメディアの台頭により衰退の一途をたどっていることは自明なことである。これに加えて、政治変動という新たな要因をこの根拠に加えざるを得ないのではないか。また、この新しい問題要因が「政治漫画」の再検討を促し、メディアとしての機能の回復につながるのではないか。本稿は以上のような問題関心から、羽田政権期の「政治漫画」を「笑い」の知見をふまえて内容分析を行い、メディアとしての「政治漫画」の再検討をし、それらを通して羽田内閣の性格を明らかにしようとするものである。

## II 事例研究

### (1) 分析手順

一九九四年四月一日より同年六月三〇日迄の「朝日新聞」、「毎日新聞」、「読売新聞」縮刷版(東京最終版)に掲載された「政治漫画」二二二枚を分析の対象とした。内訳は、「朝日」(以下、上記のように略記)八八枚、「毎日」二六枚、「読売」九八枚であった。これら二二二枚の「政治漫画」について、1. 内在するユーモアの分析、2. テーマの分析、3. シンボルの分析、4. 文字情報(記事・杜説)との関連、の四つに分けて考察をした。

## 1 ユーモアの分析

「政治漫画」二二二枚すべてにおいて一枚ごとに「笑い」（おかしみ）を誘うかどうかを基準にして評定者（学生）に二名に評定させた。ここにおいて「笑い」を誘う「政治漫画」を選定させた。次いで、選定された「政治漫画」九七枚について「笑い」の根拠を問うために①敵愾心や心理的暴力を読み手に感じさせる「攻撃性」、②対象人物・事物の無能力を嘲う「優越性」、③矛盾や対立する要素が共存することによる「不調和」、④予期せぬ突発的な事態から生ずる「意外性」を表わす一コママンガを各々一枚ずつ計四枚見せ、これを基準にして前述の九七枚を一枚ごとに四つのカテゴリーに分類させた。

これらの作業の後に、「笑い」を誘う「政治漫画」について「笑い」の程度を五段階尺度を用いて評定させた。「全く笑いを誘わない」ものに一点を与え、「少し笑える」に二点、「笑える」に三点、「かなり笑える」に四点を、「思わず笑ってしまう」ものに五点をそれぞれ与えて得点化した。

## 2 テーマの分析

「政治漫画」が題材とする社会的現象や出来事を一枚ごとに読取り、各々「政治漫画」に対して一項目を原則として該当する出来事を抜き出した。その出来事を時系列にまとめるとともに、「政治」、「外交」、「経済」、「労働」、「国際関係」、「文化」、「社会」、「スポーツ」、「その他」に分類し各頻度を調べた。「政治」においては、下位範疇として「政治倫理」、「内閣」、「政党」、「政治改革」、「その他」を設定して分類した。テーマが一項目に限定できない「政治漫画」は、その頻度が高い場合には重複したテーマの選定および程度を評定者に評定させることを考慮した。また、前項で示した「笑い」に関する「政治漫画」についても、別個にテーマの選定を行なった。

### 3 シンボルの分析

「政治漫画」の内容について、主語・述語関係が明確になるような短文を被験者五名に分担して叙述させた。これをもとにして、「主体」と「客体」にそれぞれ出現する事物と人物の出現数を調べた。事物については、何をシンボル化しているのか留意して前述の被験者に問いただした。「述語」については、短文から類型化し、その類型にどのような「主体」や「客体」が描かれているかに着目して分析を行なった。

### 4 文字情報(記事・社説)との関連

九四年四月から三カ月間の「政治漫画」について背景となる出来事に対して、当該「政治漫画」が「好意的である」、「非好意的である」、「どちらでもない」のいずれの立場をとっているのかを評定者二名に評定させた。同様にして、「政治漫画」一枚ごとに関連のある「記事」と「社説」を「朝日」、「毎日」、「読売」から抜き出してその見出しをもとに三段階尺度を用いて前述の評定者に評定させた。また、①「政治漫画」と「記事」、②「政治漫画」と「社説」、③「政治漫画」と「記事」のうちどちらかを、④では「政治漫画」と「社説」のうちどちらかを、テーマに関するわかりやすさを基にして「政治漫画」、「記事」(または「社説」)、「どちらでもない」の三項目から評定者に一つを選ばせた。

## (2) 分析結果と考察

### 1 ユーモアの分析

「政治漫画」全体二二二枚に対して、ユーモアを感じさせた「政治漫画」（以下「ユーモア」と略記）は九七枚であった。四五・七五％を「ユーモア」が占めることになる。「細川政権」期の「ユーモア」は当該期の「政治漫画」全体に対して四〇・二％であつたから、若干の高率といえる。とはいえ、「政治漫画」が「笑い」の機能と「解説・報道」の機能をほぼ半々持っていることは経験的に知られているので、それほどの差違はない。これは、「ユーモア」の月別出現数に差違がないことからみると、「政権」発足当初はその目新しさによつて多少の「ユーモア」の増加がみられるはずだが、それもないことになる。とすれば、どの月も一様に「ユーモア」が登場するのは、羽田政権の目新しさが無かつた、「新政権」としての特徴を見いだしにくかつたと考えられる。「細川政権」の終焉があまりに唐突だったために、新政権誕生までに半月を要していることから、「暫定的な内閣」という認識が羽田政権発足当時からつきまとつていたことがこの（表1）から読み取ることができる。「暫定内閣」のレッテルが通常みられる政権期間の「政治漫画」の出現頻度の変化を示すこともなく「いつのまにか終わつていた」という印象を読み手に与えたのである。

(表1)「政治漫画」の出現数  
 (セル内上段は総枚数,  
 下段は「ユーモア」登場枚数)

	朝日	毎日	読売	計
4月	29	8	31	68
	12	8	13	33
5月	30	9	34	73
	21	4	11	36
6月	29	9	33	71
	8	4	16	28
計	88	26	98	212
	41	16	40	**97

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ , \*\*\* $p < 0.001$

次に(表2)から、「ユーモア」の分類項目と新聞との関係を見ると、全体として新聞間の差がみられた。また、②「優越性」と⑤「その他」についても有意な差がみられた。これは、「毎日」の「政治漫画」の掲載枚数の少なさ(「朝日」と「読売」はほぼ毎日、「毎日」は各週二枚)に起因すると思われる。各新聞ごとの分類項目の特徴をみると、「毎日」と「読売」がどの項目にもとりたてて差が掲載数ではみられない。これに対して、「朝日」においては有意な差がみられた。「朝日」では、②の「優越性」が最も多く掲載された。一般に政治風刺・政治批判は「攻撃性」の「ユーモア」で表現されることが多い<sup>(4)</sup>。また、「優越性」はこれに比べて批判がより間接的である<sup>(5)</sup>。このことから、羽田政権の評価よりも「様子見」を「政治漫画」はとったとみることができる。「攻撃性」の強い「ユーモア」は、対象を「敵」と認知しそれによって自らの立場を防衛しようとするものである。「優越性」のそれは、「敵」としての利害関係が「攻撃性」よりも明確でない、あるいはその必要がない<sup>(6)</sup>。したがって、距離の置き方に切迫性がない。また、「攻撃性」の前段階とみることもできる。観察の姿勢が「優越性」にはある。ここから、羽田政権の評価を先送りにした結果を(表

2) で示しているといえる。<sup>(7)</sup>

（表2）「ユーモア」の類型

	朝日	毎日	読売	計
①攻撃性	9	5	11	25
②優越性	15	2	9	26**
③不調和	10	2	6	18
④意外性	5	4	4	13
⑤その他	2	3	10	15*
計	41*	16	40	97**

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ , \*\*\* $p < 0.001$

統計的に有意な差違がみられた⑤「その他」の項目をもう少し細かく見てみよう。（表3）によれば、「読売」の頻度が高いことがわかる。他の二紙は文字通り「その他」と扱える数量だが、「読売」は①「攻撃性」に次いで高い頻度を持っている。「愚かさ」や「矛盾・対立」以外の「対比・対照」の存在や「カオス」状況に高い関心をはらっているのである。また、「読売」の羽田政権に対する態度が「その他」項目の頻度の多さにあらわれていると見ることができ。上述したように、「攻撃性」は直接的な政治批判をする際によくみられる。立場の明快さを売り物にする「読売」の特質がここにおいて反映されている。と同時に、直截的な表現では扱い得ない「得体の知れない」羽田政権の様相を「政治漫画」の中に表現しようとした試みが、従来の分類にとどまることを許さなかったといえよう。

(表3)「その他」の項目

	朝日	毎日	読売	計
対 比 ・ 対 照	1	0	5	6
無 責 任	0	1	2	3
混乱・カオス	0	2	3	5
言 葉 遊 び	1	0	0	1
計	2	3	10	15*

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ , \*\*\* $p < 0.001$



## 2 テーマの分析

羽田政権期間の「政治漫画」のテーマとなったできごとを時系列に表わしたのが（表4）である。佐川急便への一億円借り入れ金問題で四月八日に突如辞任した細川護国首相の後任として羽田孜外相が決まったのは、辞任後の四党派（社・民・さ・民革連）党首会談であった（四月一五日）。しかし、連立政権の組み替えに伴う連立内の対立が表面化し、二五日に国会で指名されたものの社会党の政権離脱による「少数与党」を余儀なくされた羽田政権は、発足当初から政権の脆弱さが指摘されていた。このような政権成立の推移と政権の性格を「政治漫画」が端的に表わしていることが（表4）から見ることができる。

(表4) テーマとなる出来事

- 94・3・31 細川首相の佐川急便事件で審議中断。
- 4・1 暫定予算案成立を待越。
  - 米が年次報告発表。日本の貿易障壁突出強調。
  - 5 細川首相辞意騒動。「疲れたから辞めたい」と発言。
  - 8 細川首相が辞意表明。
  - 11 与党2極化(社・民・さ・新・公・日) 決定的に。4党派(社・民・さ・民改連) 党首会談。
  - 15 連立与党代表者会議。基本政策で10項目合意。「羽田首相」が確定。
  - 17 自民党渡辺美智雄氏離党表明。
    - ボスニアのセルビア勢力が停戦合意を無視してゴラジュデ砲撃を再開。
  - 19 渡辺氏離党・出馬断念。首相指名選挙で河野洋平自民党総裁支持へ。
    - 連立与党北朝鮮問題「憲法の下で対応」と合意。
  - 22 連立与党、政策で合意。羽田氏擁立を決定。
  - 25 羽田首相、国会で指名。細川内閣総辞職。社会党が「新会派「改新」」に反発し連立を離党。
  - 28 羽田内閣、少数与党で発足。
- 5・2 羽田首相が欧州歴訪へ出発。
  - 南アフリカの制憲議会選挙でマンデラ ANC 議長が勝利宣言。
- 4 永野茂門法相が「南京大虐殺はでっちあげ」と見解。
  - 現制度での解散否定。首相。
    - イスラエルと PLO がパレスチナ暫定自治に調印。
  - 6 法相「南京大虐殺ででっちあげ」発言を撤回、陳謝。
  - 7 法相辞意。首相更迭。後任法相に中井治(ひろし)氏(民社)。
  - 9 南アフリカ史上初の黒人大統領マンデラ氏就任。
- 10 羽田首相が発の所信表明演説。「改革と協調」を重視。
  - 社会・さきがけ党首会談で連携の強化で一致。
- 12 衆院本会議で各党派代表質問。
- 13 奥田敏和衆院議院運営委員長(新生党)の解任決議案を自民党が提出。
- 16 自民党の「YKK」(山崎拓、加藤紘一、小泉純一郎)3氏中心の新政策集団「グループ・新世紀」が旗揚げ。
- 17 議運委員長解任決議案事実上棚上げに。
  - 自民党が首相との会談で内閣不信任案の提出を表明。
- 18 政府が暫定予算の補正案を国会に提出。
  - 首相、公共料金の値上げを「年内凍結」を指示。
- 20 伊東正義元外相が死去。
  - 普遍的「安保」は広い概念、と連立与党が統一見解を参院予算委員会で説明。
- 21 久保田社党書記長、内閣が自発的に総辞職すれば連立復帰を協議すると発言。
- 22 村山富市社党委員長、総辞職拒むなら解散要求と発言。
- 24 日米包括経済協議の再開発表。
- 26 米、対中最恵国待遇を更新。
  - 国際捕鯨委員会(IWC)総会が南極海聖域案を採択。
- 31 細川前首相の借入金問題で、深山正敏・元秘書の証人喚問要求を与野党合意。
  - 産業構造審議会の報告書で「米は10分野で不公正」と批判。
- 6・1 大内啓佑民社党委員長が「改新」結成で責任をとり辞任。(後任は米沢隆氏6/8)
- 2 IAEA が北朝鮮の核査察で「非軍事転用検証できず」と見解。
  - 通産省の内藤・前産業政策局長の辞任問題で、熊谷通産相(当時)が社会党議員に「やらせ質問」依頼が発覚。内藤・前局長の参考人招致決定。
  - 4 「核兵器使用は国際法に違反せず」と外務省見解。国際司法裁判所に提出予定の「陳述書」で明らかに。
  - 6 北朝鮮核疑惑で政府が対処方針。「憲法の枠内で最大限の措置」
  - 8 94年度予算案が衆院通過。
    - 「核兵器使用」問題の表現を削除。柿沢外相が陳謝。
  - 10 IAEA 理事会が北朝鮮の核査察拒否で初の制裁案採択。
  - 13 北朝鮮 IAEA 脱退宣言。
  - 15 カーター元大統領が板門店経由で北朝鮮入り。
  - 16 金日成主席がカーター氏と会談。
    - 衆院予算委員会が細川前首相の21日喚問を議決。連立与党の反対を押し切る山岸、米沢氏社党に連立復帰要請。村山氏明言避ける。
    - 米大統領が米朝高官協議の用意と記者会見。
  - 17 カーター・金再会談。
    - 政権復帰へ首相交渉も条件と社党国対委員長示唆。
  - 18 南北首脳会談合意。金日成主席が提案。
  - 21 細川前首相が衆院予算委の証人喚問に出席。金銭疑惑を否定
  - 23 94年度政府予算が成立。
    - 自民党が内閣不信任案提出。首相、社党復帰を条件に総辞職を示唆。
  - 24 社・与党の政策協議不調で本会議開会すれ込む。
  - 25 羽田内閣総辞職。
  - 27 自民・社会党首会談。「連立」を自民要請。
  - 29 村山首相、国会で指名。
  - 30 村山内閣が成立。自民・社会・さきがけの連立内閣。

ところで（表5）によれば、テーマ別の「政治漫画」の頻度では全テーマに対する「政治」テーマの割合が、「政治漫画」全体でも「ユーモア」においてもともに八〇％を超えている。「政治」漫画の面目を保つ反面、総合的な社会戯評としての「政治漫画」の働きが失われ、個別化・専門化の傾向が生まれている。この傾向は、この分析におけるテーマの範疇の大きさでは重複するテーマがきわめて少ないことからでも明らかにすることができる。先行研究の<sup>(8)</sup>ように、ある特定の事件・できごとに対する「政治漫画」においては、一般概念としての「政治」概念を設定してそれに従属する形で個別の政治現象や出来事が組み合わされていた。その場合でも、「政治」に対する「経済」や「社会」との重複を見つけることはまれであった。本論文のような「定点観測」的な分析でも、特定現象の分析でも双方から「政治漫画」の機能の一面が変化していることがわかる。

（表5）をみると、「政治」（八一・三％／八四・七％）（政治漫画全体／「ユーモア」）に次いで「世界」（二三・一％／八・二％）が続き、少し離れて「外交」（三・七％／六・二％）となる（政治漫画全体から見た場合）。「世界」も「外交」も「政治」の近隣範疇ではあるが、羽田政権時では「世界（情勢）」の変動に日本の「外交」手腕が対応できないという日本外交の特質を継承する形となった。

(表5) テーマ別頻度：

重複があり実際の枚数と一致しない

	朝日	毎日	読売	計
政治	70 32	25 16	79 35	174*** 83**
経済	1 1	0 0	1 0	2 1
外交	5 3	0 0	3 3	8 6
労働	0 0	0 0	0 0	0 0
世界	15 5	2 1	11 2	28** 8
文化	0 0	0 0	0 0	0 0
社会	0 0	0 0	2 0	2 0
計	91 41	27 17	96 40	214*** 98**

\*p&lt;0.05, \*\*p&lt;0.01, \*\*\*p&lt;0.001

この「世界」と「外交」の範疇の間に「政治漫画」全体として差が表れたことは、(表6)の月別の変化からも明瞭に映し出されてくる。(表6)によれば、「外交」は枚数の総数は少ないけれども「ユーモア」との比率をみると、五月には一〇〇%となっている。六月の「世界」(六枚/三枚)と比較すると、際立っている。そもそも政権における外交は自らの正当性を外に向かって知らしめるとともに、国内の批判勢力に対して「外からの好意的反響」を用いて政権の正当性の根拠とすることを目的とする。したがって、政権成立直後の外交の可否は当該政権の長さを左右するともありうる。日本の場合、アメリカとの関係が重視されていることと、先進国間には日本は「外交下手」のイメージがあることがあって、先進諸国に比べて外交の要求水準は高くない。とはいえ、事実上の政権初の「外交」となった五月連休の「欧州歴訪」は羽田首相にとって政権の維持には役に立ちにくかったようである。五月の「外交」はこの「欧州歴訪」に集中しており、「ユーモア」の類型では「不調和」が五分の四を占めている。また、このテーマの

「不調和」の得点の平均は三・五と比較的高い。羽田首相本人は「意気揚揚」としているが欧州の首脳は「暫定政権」の認知から「シラケた」表情や行動をしており、このズレが基盤となって「ユーモア」を生んだと見ることが出来る。欧州到着時から飛行機のタラップが弱々しく、足元（「少数与党」の文字入り）が覚束ない（「朝日」94・5・2 M）（以下、「政治漫画」の例示表現は、「新聞名」西暦・月・日 M（朝刊）E（夕刊）とする）。帰国の際にも、鳥の羽一枚に乗っていく羽田首相を軽く息を吹き掛けて送り出す欧州の首脳の姿（「朝日」94・5・8 M）がズレを端的に描いている。

（表6）から「世界」についてみると、四月から六月にかけて「政治漫画」としての枚数は倍増している。が、その中の「ユーモア」については枚数に変動がない。「政治漫画」と「ユーモア」との比率は逆に減少している。六月には、北朝鮮が国連の核査察を拒否したことが問題化し、国連脱退をするおそれもあった緊迫した「世界」情勢であった。この時期の「世界」の九割が北朝鮮問題であったことを鑑みると、その緊迫さがみてとれる。この緊迫さ（あるいはシリアスな状況）が「政治漫画」のユーモア性を低くさせる原因となったと考えられる。<sup>(10)</sup>「外交」には、描き手や読み手だけでなく、作品に登場する人物の一部にさえも「現政権は暫定政権」という了解事項があった。これが、今後の進展をある程度まで予測可能にし、その上での「不調和」であり「ユーモア」であった。換言すれば、予見可能性が描き手にとって自らを安全地帯に置くことができる「保険」であった。自らが新しい意見を創出するのではなく、従来の多数派の見解に乗じて主張することのできるユーモアであった。ところが、六月の「世界」にはこの予見可能性が「外交」に比べて低かった。北朝鮮の国連脱退が生じた場合どのような事態になるかが共通の了解として存在しにくかったのである。<sup>(11)</sup>もっとも、描き手と読み手に共通の了解事項がないところにはユーモアのみならずコミュニケーションそのものも存在し難い。しかしながら、了解事項の定番化はマンネリを生みユーモアのみならず「政治漫画」の批判性それ自体に影響を及ぼすことになる。共通の了解事項の創造と破壊の微妙な均衡の上に「政治漫画」の「笑い」は成立しているのである。

(表6) 月別頻度

	4月	5月	6月	計
政治	62 31	58 29	54 23	174 83
経済	0 0	1 0	1 0	2 0
外交	2 1	5 5	1 0	8 6
労働	0 0	0 0	0 0	0 0
世界	4 2	8 3	16 3	28* 8
文化	0 0	0 0	0 0	0 0
社会	0 0	2 0	0 0	2 0
計	68 34	74 38	72 26	214*** 98*

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ , \*\*\* $p < 0.001$ 

(表7) は「政治」テーマをもう少し細分化したものである。これによれば、「内閣」(四六・九%／五〇・六%)と「政党」(二五%／二・三%)とで七〇%強を占める。「内閣」は首相とその周縁の動静を描き、「政党」では連立内閣としての与党内の動向と野党としての自民党・社会党という五五年体制の与野党の動向が中心となっている。「選挙」が低率なのは、この時期に大きな国政レベルの選挙が無かったことが根拠としてあげられる。「国会」と「政治倫理」(政治疑獄・汚職)は、争点として結実するできごとがあまりみられなかったことが「政治漫画」のテーマとしてこの時期に好まれなかった理由と考えられる。

（表8）では、月別の全体としては月ごとの有意な差を見ることはできなかった。しかし、「内閣」と「政党」に関しては「ユーモア」においても有意な差があった。「内閣」のテーマとしての関心は月を追って減少し、「政党」をテーマとする「政治漫画」が増加した。羽田内閣への関心は薄れ、特に六月においては政権獲得に向けての各政党の動きが活発になったことを「政治漫画」は描き出している。このことは、「国会」をテーマとする「政治漫画」に着目するとより一層はつきりする。「国会」はこの三カ月間変動が小さく数も少ない。一月三十一日に召集された第一二九（通常）国会は、六月二十九日に村山富市首相を指名して閉会するまで二回内閣の総辞職に遭遇する「異例」の国会であっ

（表7）「政治」小テーマ出現度数

	内閣	国会	選挙	政党	政治倫理	その他	計
朝日	38	3	2	24	7	3	77
	22	2	1	10	4	1	40
毎日	13	4	1	5	3	5	31
	5	2	0	2	1	3	13
読売	39	7	4	19	7	8	84
	18	4	1	7	3	3	36
計	90	14	7	48	17	16	192
	45	8	2	19	8	7	89

た。しかしながら、「政治漫画」としての登場の少なきは六月二三日の九四年度予算案の成立があっても変わらず、政権の推移の方に「政治漫画」の関心があった。これは、予算案の成立が契機となつて、「羽田おろし」が政界紛糾という形をとつて現われたことの描写に「政治漫画」が終始したことによる。とすれば、ここにおいても「羽田内閣は予算成立内閣（暫定内閣）」という了解が政界に存在していたことが「政治漫画」に反映されたとみることができるといえる。

(表8)「政治」小テーマ月別出現数

	内閣	国会	選挙	政党	政治倫理	その他	計
4月	43	3	0	8	10	5	69
	22	2	0	0	5	4	33
5月	30	6	6	19	2	2	65
	15	3	2	10	1	1	32
6月	17	5	1	21	5	9	58
	8	3	0	9	2	2	24
計	90**	14	7	48*	17	16	192
	45*	8	2	19**	8	7	89

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ , \*\*\* $p < 0.001$ 

これまで述べてきたテーマの分析の前提として、「政治」テーマの選択の決定に関与してきたものは何かを考察する必要がある。このために、「政治漫画」の表現技法に着目した。具体的にはテーマが選択される根拠を考えるにあつた。



て、作品に用いられている修辞技法から明らかにしようとした。メドハストラの知見をもとにして、「政治漫画」のテーマ設定の根拠を四つの要素①政治常識、②文化的示唆、③人物の特徴、④時事的話題に分けて重複を許して「政治漫画」一枚ごとにこの要素との関係を検討した。この結果②文化的示唆が五割、③人物が三割、①政治常識が二割弱、となった。また、重複の度合いをみると、単独ないし二項目利用で全体の九三・七%を占めた。具体的には、②と③の組合せが最も多く、次に②と①の組合せであった。後述するように、「政治漫画」に登場する人物は「政治家」が多い。しかも「お馴染みの顔」が並ぶ。そこであえて「政治」であることを前面に出すことが「政治漫画」では求められず、むしろ後景に「政治」を退かせ「場面背景」に貢献させている場合が多い。

ここで羽田政権に関する「政治漫画」で、①から④までの項目がどのようなシンボルによって描かれているかをみる。すると、①では国会議事堂、政党シンボルマーク、証人喚問（の状況）などが多い。議事堂は「国会」を、政党シンボルマークは「政党」を、証人喚問は「政治倫理」を、それぞれ象徴化したものである。「政治」小テーマでみた頻度数の小さいテーマを象徴するシンボルの頻度が多いのは、小テーマ内最大の「内閣」が人物（首相・閣僚）優位に構成されるテーマであり、人物のもつ画像上の影響力の強さを反映することによる。つまり、「政治漫画」の背景を構成する要素である①政治常識は、人物の影響力を排除しているのである。

②の文化では、自然環境や風俗・風習から「政治漫画」の内容を理解させようとするくふうがみられる。ここでも人物が大きく影を落としている。自然環境の中に擬人（擬態）化をさせて③に表れるような人物の性格を動植物に語らせる手法が多く使われている。これに次いで「身体」では個人の能力を象徴し、スポーツ・風俗風習・芸能でさまざまな人間関係（対決・和解・儀礼的行為）を表わしている。③では、人物の性格が如実に表わされている。いわゆる「殿様」的性格で描かれる細川氏が最も多く、ひ弱さの象徴として羽田首相が次に登場し、かなり離れてから辣腕・剛腕イメージで小沢（一郎）氏が現われる。政治家の性格を表情だけでなく、行動によって（文化的な事柄と組み合

わせる——武村・小沢両氏を犬にして喧嘩をさせることなど——ことによって「政治行動」と「政治家としての資質」にまで描きだそうとしている。

### 3 シンボルの分析

(表9) からわかるように、「政治漫画」における「主体」には九二・四%もの高率で人物が登場する。また、「主体」となる事物の中にも特定の人物を示唆するものがあるので、それらを含めるとほぼ一〇〇%に近い割合になる(九八%)。政治がきわめて人間らしい営みであるとしても、他の事例に比べて高率である。佐川急便事件に政界が揺れた時期の「政治漫画」の「主体」の人物比は七〇%強であった。<sup>(13)</sup>さらに(表10)より人物の特定化状況をみると、この時期の「歴代首相」と野党党首で特定化された人物の三分の二を数える。佐川急便事件の時より微増している(六二%)。首相(与党党首)と野党党首の構造は、自民党体制の時代と若干異なるとはいえ、(表10)からみると対立構造を出現数におきかえれば「政治漫画」の基本構造を逸脱しているとはいえない。むしろ、「主体」に登場する人物の割合の増大というよりも、擬人化できる事物あるいは政権を象徴する事物が少ないことを特徴とすべきであろう。三カ月で三人もの首相が登場する政治の変動期において、首相ならびに政権を象徴する事物を提示して定着させる時間的余裕がなかったことが「主体」における人物への傾倒に拍車をかけたと考えられる。

「客体」における事物と人物との割合をみると、（表9）より「主体」ほどの人物偏重は見られない。しかし、人物七割、事物三割と人物の優位は変わらない。従来の研究では行為主体の動作が及ぶ「客体」については事物による人物の擬人化が行なわれ、直接人物を「攻撃」することを避ける傾向にある——特に現代では——とされてきた。<sup>(19)</sup>これに対して、（表9）の結果が表わしているのは、上述した擬人化すべき事物の少なさ、ひいては擬人化しうるシンボルの発見が不十分だったことに還元されよう。また（表10）の「客体」の項目からみると、「主体」の特定化とは大筋で変わっていないように見える。しかし、「客体」としての描かれ方にまで詳細にみてみると、たとえば羽田首相は「いじめられっ子」や「受け身の女性」というような弱い者として描かれている（細川元首相は首相を辞任しても「殿様」として描かれている）。この羽田首相の弱者イメージが政権期の首相イメージとしてつきまとっている。

（表9）「政治漫画」の人物・事物

		朝日	毎日	読売	
主 体	人物	58	21	54	133**
	事物	7	1	3	11
					144
客 体	人物	22	4	20	46
	事物	10	5	5	20
					66

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ , \*\*\* $p < 0.001$

(表10) 特定化された人物(「主体」)

	朝日	毎日	読売	
羽 田	14	6	15	25
村 山	12	0	6	18
細 川	4	4	11	19
河 野	8	2	4	14
クリントン	4	1	3	8
その他	14	5	14	33
計	52	18	53	123

(「客体」)

	朝日	毎日	読売	
羽 田	5	1	3	9
村 山	2	1	4	7
河 野	3	1	2	6
金日成	2	0	1	3
渡辺美	2	0	1	3
細 川	0	0	5	5
その他	6	0	2	8
計	20	3	18	41

(表11) から「述語動詞」の特徴をみると、積極的に行動しようとする「努力的行為」と「受動的行為」が双壁をなしている。前者は、無駄な努力を暗示する行為であり、ユーモアの類型の「不調和」や「意外性」と共通点をもつ。祭りの神輿を羽田・村山・河野の三人がめいめい勝手な方向に引っ張ってついに壊してしまう「政治漫画」(「朝日」94・5・16M)がその例である。「受動的行為」と並んで羽田政権の「存在の薄さ」を象徴するものである。政治批判の矢面に立つのは首相の役割の一つであり、その意味で「政治漫画」では好意的には描かれない。しかし、それは首相の行動に対する評価であって、首相の存在そのものに対する否定的評価は政権末期にみられるにすぎない。羽田首相は内閣成立当初から「受動的行為(状態)」に晒される姿を「政治漫画」に描かれていた。大きな砂時計の中で首相の執務をする「政治漫画」が描かれたのは、内閣成立の二日後である(「朝日」94・4・30M)。かくして、羽田政権はその短命性を成立時から内包していたことが「述語動詞」の特徴からうかがえるのである。

#### 4 文字情報（記事・社説）との関連

（表12）は「政治」をテーマにした「政治漫画」の中でユーモア性が認められたもの八三枚と、その「政治漫画」各々に対応する記事・社説の個別テーマに対する立場を示している。この表からは、記事の「客観報道」性が八五・四％の「中立」の立場で表わされている。「政治漫画」は否定的立場は六〇％をいくらか下回る。これに対して、社説は否定肯定合わせて八〇％を超える。「政治漫画」は態度レベルでは、肯定・否定あわせても六四・四％しか得られない。したがって、テーマや関連事象による態度表明で「政治漫画」は「社説」の後塵を拝することになった。

（表11）述語（動作）の分類

	朝日	毎日	読売	
努力的行為	8	5	7	20**
受動的行為	5	5	9	19
能動的行為	7	0	5	12*
背信的行為	4	0	8	12*
無力感	5	3	5	13
対立・闘争	2	0	2	4
感情の表出	3	2	0	5
計	34	15 ***	36 **	85 ***

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ , \*\*\* $p < 0.001$

これに対して(表13)では、「わかりやすさ」を活字情報と「政治漫画」との間で比較をしている。それによると「政治漫画」のほうが活字に比べてはるかに「わかりやすい」という結果が表れている。全体の八八・五%にもおよぶ「政治漫画」の優位状況は、態度レベルでの結果と矛盾するようにみえる。が、(表13)の「DK」の内容をみると、優位の判断ができない理由として、「政治漫画」と活字情報が互いに独立した特徴をもつのではなく、相互補完の性質をもっているという「補完」が三四・一%と最も高い割合を得ていた。次いで「政治漫画」と活字情報の「わかりやすさ」が同程度と判断したケースが二九・二%あった。このように、「政治漫画」と活字情報の組合せで初めて内容が理解できるといふケースが六〇%を超えていることから、認知レベルにおいては「政治漫画」の画像としての特徴が態度レベルに比べて鮮明になることがわかる。

(表12)「政治漫画」・記事・社説の立場

	肯定	中立	否定	計
政治漫画	5	29	49	83
記 事	1	70	11	82
社 説	4	7	25	36
計	10	106	85	201

### III おわりに

一九九四年四月から三カ月間の「政治漫画」の内容分析を、「政治漫画」の「解説」と「評論」の機能をもとにして行い、羽田政権の性格を明らかにしようとした。その結果、「政治漫画」全体の約半数に及ぶユーモア性のある「政治漫画」から「不調和」と「優越性」が見いだされ、間接的な政治批判の対象としか羽田内閣が扱われなかったことが示された。また、テーマの分析では「内閣」の動静に関心が置かれ、内閣の業績を反映する項目が少ないことが明らかにした。シンボルの分析でも羽田内閣や羽田首相自身を積極的に際立たせるシンボルを見付けだすことはできな

(表13)「政治漫画」・記事・社説

——優位性・明瞭性——

	優位性			D K		
	政治漫画	記事	社説	補完	両方不適	同等
朝日	20	2	2	3	3	4
毎日	6	0	0	3	2	3
読売	20	0	2	8	0	5
計	46	2	4	14	5	12

かった。このように「政治漫画」にみる「羽田政権」は、政府予算の早期成立のみを目的とした「暫定内閣」であり、連立政権の試行錯誤の過渡期的性格を持つものとして描かれていた。

最後に、「政治漫画」の分析に関して、今後の展望を提示しておきたい。

「政治漫画」がマス・コミュニケーション論の中で「議題設定」機能を持つことが経験的に知られているが、受け手のどのレベルに効果をもたらすかをより詳細に検討する必要がある。描き手が多様な現実の中からの再構成を行なうて描き手自身のものの味方を「政治漫画」によって提示する。このことと同様に、作品としての「政治漫画」をみる受け手も自らのものの見方によって当該作品を見ている。さらに、その過程を観察する観察者の視点がある。描き手、受け手、観察者の視点をそれぞれのように設定するかが「政治漫画」の内容分析に求められることになるだろう。

#### 註

- (1) 拙稿、「政治漫画」とユーモア——内容分析と効果研究——（『北陸法學』第二巻第一号、一九九四年）五九—七九頁。
- (2) 「笑い」と「解説・報道」の両機能を併せ持ち、いずれかが顕在化するとみなすこともできる。重要度をどちらに置くのかという問題として扱い、「議題設定機能」との関連を考へうる。
- (3) 首相の登場数やバーソナリティーの分析から同種の知見を引き出しているものとして、フェルドマン・オフエル、「政治マンガにみる『日本の首相』」（『潮』一九九三年十二月号、一一〇—一二七頁）がある。
- (4) 拙稿、前掲、六三頁。
- (5) 拙稿、「政治漫画にみる政治過程——PKO法案における政治漫画の内容分析」（『北陸法學』第一巻第一・二合併号、一九九三年）八三—一二〇頁。
- (6) 「正論」と「俗論」の政治過程については、次の文献を参考にした。京極純一、「日本の政治」（東京大学出版会、一九八三年）三一六—三四〇頁。
- (7) 「攻撃性」と「優越性」の程度の差をみればその特質の差がよりはっきりするはずであるが、統計的には有意な差を見つけること



はできなかった。

- (8) 拙稿、前掲「政治漫画にみる政治過程」参照。
- (9) 拙稿、「選挙と『政治漫画』——研究動向・内容分析——」（『選挙研究』第五号、一九九〇年、一〇五—一一九頁）参照。
- (10) 「重大な事態」を主要なテーマとして描けないところに日本の「政治漫画」が抱える問題がある。
- (11) この時期の直後にある連載漫画が北朝鮮の核問題をテーマとして扱っていた。一定の立場が明快に表れておりわかりやすいものであった。だが、このような「政治マンガ」はどうしても「政治宣伝」の印象を拭い去ることができない。ユーモア性のある「政治漫画」の例ではないが、漫画一般が陥りやすい問題として例示した。
- (12) Martin J. Medhurst, & M. Desousa, "Political Cartoons as Rhetorical Form: Taxonomy of Graphic Discourse," *Communication Monographs*, 48, (1981), 197-236.
- (13) 拙稿、「政治漫画にみる政治倫理」（『法政論叢』第三〇巻、一九九四年）三一—四一頁。
- (14) 未刊行論文では、一九五四年の「造船疑獄」と一九九二—三年の「佐川急便事件」をテーマとする「政治漫画」の比較分析を行い、「造船疑獄」では批判が直接人物に向けられることが多いことを示した。